川口市立医療センター広報紙

花水木

ハナミズキ

2019
Vol.37
2月10日

Kawaguchi Municipal
Medical Center

特集

周産期センターの取り組み

p2～p3

目次

p4 病院の取り組み：災害基幹拠点病院の役割
p5 KMMC Report：2018 クリスマスコンサート
p6 部署紹介：5A病棟・5B病棟
p7 KMMC Report：地域連携推進懇話会を終えて
p7 医師の交代のおしらせ
p8 四季の移ろい
p8 ミニギャラリー3ヵ月

川口市立医療センター
イメージキャラクター
「みみたーズ」

基本理念

市民に信頼され、安全で質の高い医療を提供します

特集

周産期センターの取り組み

分娩という非常に危険な時期を適切に管理し、人生の一歩目二歩目につまづいている赤ちゃんやその両親をフォローしながら、その後の人生を幸せに過ごしてもらうことが、私たち周産期センタースタッフの使命です。小さく産まれたり、具合の悪い赤ちゃんたちも適切にケアできれば、大きく元気に育ってくれます。私たちの仕事は、赤ちゃんとご両親の未来にダイレクトにつながっています。

周産期母子医療センター

周産期母子医療センターには、総合周産期母子医療センターと地域周産期母子医療センターがあります。総合周産期センターは、母体胎児集中治療管理室（MFICU）を含む産科病棟や新生児集中治療管理室（NICU）を備えた規模の大きい医療機関です。地域周産期母子センターは、産科・NICUを備える医療機関です。埼玉県には、総合２施設、地域９施設があります。しかし、人口715万、出生数５万５千人の埼玉県に対し、人口1380万人、出生数11万人の東京都には、大学病院などが多いため、総合13施設、地域14施設があります。人口、出産数に比して埼玉県の周産期医療は、かなり見劣りするのも事実です。

周産期母子医療センターの役割

川口市立医療センターは、埼玉県南東部をカバーする地域周産期母子医療センター（産科30床、NICU30床：NICU ９床、GCU（新生児治療回復室）21床）として診療を行っています。県内２つの総合周産期センターと役割分担しながら活動をしています。しかし担当する埼玉県南東部地域（戸田、蕨、川口、草加、八潮、三郷、吉川）では、規模の大きい産科施設や、様々な公的病院の産科を受け持っており、超早産（在胎28週未満）の切迫早産、前期破水などの母体搬送受け入れ、妊娠高血圧症候群、甲状腺機能異常などの合併症妊娠、多胎妊娠（双子や三つ子）などの外来紹介が多数あります。また、妊婦健診未受診妊婦や外国籍の妊婦なども多い地域です。

平成29年度は分娩数514件（うち多胎28件、緊急母体搬送77件）でした。また、在胎35週以上で出生体重2000～2500ｇの早産低出生体重児(在胎37週未満、出生体重2500g未満)であっても、呼吸循環血糖などが落ち着いていれば、新生児

科管理のもと、産科病棟で母児同室（お母さんと一緒に過ごしてもらう）を行っています。平成29年度のその数は89名でした。また、重症児の出産が予想される場合、新生児科医が両親に対しprenatal visit（ご両親と出生前の相談をすること）を行っています。

新生児集中治療科（NICU・GCU病棟）への入院は236名で、そのうち母体搬送からは入院66名です。また、極低出生体重児（出生体重1500g未満）は33名（うち超低出生体重児:出生体重1000g未満11名）でした。院外での分娩であっても、重症児の出生が予想される場合、新生児科医が、その施設まで救急車で赴き、分娩に立会い、蘇生をし、治療を開始しながら、新生児搬送などを行っています。

新生児集中治療科では、正常新生児の管理から最重症児の呼吸循環栄養管理まで、幅広く診療を行っています。小児外科、脳神経外科、形成外科などとの連携において、新生児外科疾患の術前術後管理も行っています。また、次世代のマンパワーを養成するため、小児科研修医や医学生、看護助産学生などの研修実習にも協力しています。

退院後の成長を見守っています

退院した児のフォローアップ外来では、気管切開、在宅酸素、在宅人工換気などの在宅医療を必要とする赤ちゃんの増加もあり、小児科と密接な連携のもと、診療を行っています。発達評価や心理面でのフォローを臨床心理士が行っています。

平成６年の開設以来24年間に6500名、極低出生体重児1300名（超低出生体重児550名）が退院していきました。年１回退院した赤ちゃん達の同窓会（コアララ同窓会）を開いています。そこでは、近況報告をしていただいたり、ご両親に育児に関するお話などを行っています。“あんなに小さく産まれたのに…”と思っていた赤ちゃん達が元気に育っている姿や頂いたお手紙を拝見するとスタッフ一同、仕事のモチベーションがあがります。

開院当初の子ども達が、大学入学や就職、結婚したと聞くと、この仕事を続けていて本当によかった、頑張った甲斐があったと思います。赤ちゃんと家族の未来を守るため、周産期センターは、日夜休むことなく動いています。

コアララ同窓会

災害基幹拠点病院の役割
～災害に備えての演習と訓練の報告～

当センターは埼玉県から災害基幹拠点病院の指定を受けています。そのため大規模な災害が発生した場合には、いろいろな役目を果たさなければなりません。以前は傷病者対応が重要視されていましたが、2011年３月11日に発生した東日本大震災以降は、発災後、医療を継続し、地域の医療をできるだけ早く復旧させることが求められようになりました。

災害時、企業は被害を受けて生産が停止すると、その後復旧活動を開始します。しかし医療は発災直後には多数傷病者受入などニーズが増加するのに加えて、また入院患者や一般救急患者のための医療を継続する必要に迫られます。この点が企業と病院の違いです。当センターの建物は耐震構造ですが、ライフラインの被害は免れませんし、交通網の寸断などで職員が登院できない事態も考えられます。そのため、最悪の状態を想定して医療継続計画（事業継続計画；BCP）を策定し、それを実行できる体制作り・仕組み作りを行っています。さらに実際に災害を想定した演習を実施して検証をかけ、体制・仕組みを改善していきます。また迅速性が求められる対応、経験が必要な対応・活動に対しては訓練が実施されます。本年度に実施された演習・訓練の中から一部を紹介します。

〈職員安否確認・連絡訓練2018.11. 4〉

当センターでは全職員の安否を確認するための仕組みを導入しています。これは震度５強以上の地震が市内で確認された場合、病院から全職員宛に一斉にメール、電話などで連絡が入ります。コールバックをしない限り最大100回までコールされます。コールバック結果を確認して、本人の安否あるいは職員家族情報、地域被害情報を得ると同時に、どのくらいで参集（登院）できるかを把握することができます。これにより前倒しで医療体制を組み立て、対策立案・指示をすることができます。目標は「24時間以内の98％の職員からのコールバック」です。今回は、実施日は伏せて11月中に実施することのみを予告し行ったところ、24時間で74％という回答率でした。今後、部署単位/全職員対象に毎年２回実施していきます。

〈赤救護所用診療物品の配置演習2018.12. 5〉

発災後１～３時間で多数の傷病者が来院することが予想されます。１時間以内をめどに赤救護所（重傷者を対象とした応急処置所）予定区域に、そこで使用する様々な器具・物品を搬送し、配置する演習です。これは主に事務職員が実施する業務となっています。普段見ることがない物品を決められた通りに配置するのは簡単ではありません。訓練に参加した職員からの意見をもとに、物品一覧の書式を変更し、そこに物品の写真を載せることになりました。

〈災害対策本部員演習2018.12. 7〉

19時半頃に発生した地震を想定し、災害対策本部員の判断・指示出し机上演習（コンフリクトゲーム）を実施しました。発災が夜間の場合は当直体制下にあり、職員数が限定されます。災害対策本部（暫定）も当直医長や当直看護師長が中心で活動します。当直医長・看護師長・事務職員の３名を１グループとして、５グ

ループが参加し、付与された状況下で、傷病者受け入れや病状変化を来した入院患者への対応指示を出すものです。この演習にはアドバイザーとして内閣官房参与佐々木勝先生にもおいでいただき、貴重なアドバイスを頂きました。

以上、災害基幹拠点病院として求められている使命を説明し、その使命を果たすために行っている平時の活動の一端を紹介しました。

発災時には病院はまず入院患者さんを守り、傷病者にも可能な限り対応する方針です。しかしながらヒト、モノ、受入能力、インフラなど必ず限界がきます。代替策、次策をとらざるを得ない、また支援・応援を期待できない状況も起こり得ます。被災時における自助→共助→公助の原則は、医療においても同様です。応急手当や蘇生術の講習は消防本部主催でも行われていますのでご参加下さい。市民の皆様のご理解とご協力をお願いします。

Kawaguchi Municipal Medical Center Report

2018 クリスマスコンサート

12月21日（金）午後５時から、毎年恒例となっている「クリスマスコンサート」が正面待合ホールで開催され、患者さんやご家族をはじめ、約130名の方々にご来場いただきました。

コンサートは、長年当センターのボランティアコンサートに携わっていただいているピアニスト石井英子さんの進行のもと、女声コーラス「四葉会」や「アンサンブル・ソレイユ」による歌唱、ピアノ演奏、テノールの二重唱のほか、職員有志も合唱やハンドベルを披露しました。また、『きよしこの夜』や『空も飛べるはず』等の曲目を、会場の皆さんと一緒に合唱し、会場はクリスマスムード一色となりました。

部署紹介

5A病棟

５Ａ病棟は、整形外科、形成外科、皮膚科の混合病棟です。定床54床中、整形外科の入院患者が９割を占めており、主に人工関節置換術、脊髄固定術、人工骨頭挿入術、創外固定術等の治療を行っています。形成外科においては、眼瞼下垂や腫瘍摘出、熱傷、植皮術など褥瘡ケアから陰圧閉鎖療法など難治性創傷の治療にも対応しています。皮膚科の天疱瘡や帯状疱疹などの入院もあり、疼痛コントロール、感染予防、副作用の対応など幅広い看護を提供しています。

患者さんは高齢者の方が多く、手術前、手術後の全身管理を含め、在宅調整や転院調整を必要とするケースが多くあります。そのため、医師、看護師、リハビリスタッフ、ソーシャルワーカー等で医師の治療方針を確認しながら、１人ひとりの患者のニーズに沿った看護が行えるように、毎週カンファレンスを行っています。不安なことや困っていることなどを聞きながら、生活の質を低下させず、安心して元の生活に戻れるように、早期に病棟担当ソーシャルワーカーと患者・家族が面談してもらいコミュニケーションを図り、新たな療養の場でリハビリが行えるよう転院調整を行っています。また患者さんにも目標をもって入院生活が送れるよう、クリニカルパスを使用し、患者支援センタースタッフと協力して、入院から退院までをサポートできる体制を整えています。

入院患者数及び手術件数が増える中、今後も看護師、看護補助者、病棟クラーク、病棟薬剤師など職員が一丸となって、患者さんとそのご家族の心に寄り添った看護が提供できるように努めてまいります。

5B病棟

５Ｂ病棟は、泌尿器科、産婦人科、呼吸器外科の混合病棟です。外科以外にも呼吸器内科、消化器内科など内科全般の患者さんも受け入れています。入退院数は全病棟の中で最も多く、月に120人から160人の患者さんが入院し退院しています。短期間の入院も多いですが、親切・丁寧に対応し早期に退院できるよう援助しております。

当病棟では周手術期の看護だけではなく、癌の増殖を抑制し成長を妨げるための抗がん剤治療に対する看護も行っています。急性期・回復期・慢性期・終末期に至る幅広い患者さんのケアを行い、患者さんに寄り添った看護を提供することを心がけています。

また患者さんへの看護の質を統一するために、クリニカルパスを導入しています。特にクリニカルパスの患者さんは、患者支援センターと連携して入院前の情報を共有し入院中に不安なく手術や検査が行われるよう配慮しています。

今年度は年々増加する高齢者に対応するために、退院支援の充実を目標に支援を行っています。具体的な支援として、退院支援専任看護師の役割を担うスタッフを育成し、退院支援に関する相談役を設けました。また医師･看護師･ソーシャルワーカー・薬剤師による多職種でのウォーキングカンファレンスを新たに開始し、病棟で働くスタッフが同じ方向を向いて統一した看護ケアを提供できるように日々努力しています。

今後も患者さんが安心して早期に退院できる環境を整え患者さん個々に配慮した看護を提供できるよう努めてまいります。

クリニカルパスとは…医療の標準化とチーム医療を推進するために、医療や看護の内容を標準化し、患者さんが入院から退院まで安心して治療を受けられるためのスケジュールをまとめたものです。

Kawaguchi Municipal Medical Center Report

地域連携推進懇話会を終えて

第16回地域連携推進懇話会が1月22日、川口市民ホール・フレンディアで開催されました。地域の診療所や病院の先生方や関係機関の職員総勢約200人のご参加をいただき、地域医療連携に関する情報交換を行いました。

地域連携推進懇話会は、患者さんの療養生活を地域全体で支えるために、当センターが医療連携を行う地域の医療機関等と顔の見える関係を作り、情報を共有する場として、年２回開催しているものです。

挨拶に立った病院開設者の奥ノ木信夫市長は、「日本の医療は重層的な医療供給体制からなっており、まずはかかりつけ医を受診することなどを市民の皆さんに理解していただくことが大切だ。」と話しました。

また、鹿嶋広久川口市医師会会長からは、「開業医としては、市内に二次医療を担う医療センターや済生会病院があることは非常に心強い。しかし、まだ敷居が高いので、この会を通して交流が深められればWIN-WINの関係が築けるのではないか。」とのご挨拶をいただきました。

大塚正彦病院事業管理者は、当センターの取組についての報告の中で、「急を要する患者さんへの対応に困っている開業医のために、救急紹介ホットラインという専用回線を設け、受入れ窓口を一本化した。10月以降は応需率が97％前後となっており、『断らない医療』を病院全体で取り組んでいる。」と話しました。

さらに、循環器科から「カテーテルアブレーション治療」、脳神経外科から「最新バイプレーン全身血管造影装置による治療」、整形外科から「脊椎の低侵襲治療」について、それぞれポスターにより最新治療の紹介を行いました。

ご出席いただいた皆様からは、新たに始まった救急紹介ホットラインへのご要望やポスター紹介へのお褒めの言葉などをいただき、大変有意義な交流の場となりました。

医師の交代のおしらせ

新　任

柳（リュウ）　舜仁（シュンジン）
1月1日付
消化器外科
患者様に最善の手術をできるように尽くします。

齋藤（サイトウ）　磨理（マリ）
1月1日付
神経内科
初めまして。どうぞ宜しくお願いします。

退　任

平柳　直人
12月31日付
小児科 副部長

友利　賢太
12月31日付
消化器外科 医長

四季の移ろい

四季と外国人

日本に住んでいると、当然と思っていることが世界に目を向けると、普通でないという別なものがあるようです。その一つが四季ではないでしょうか。春夏秋冬と日本では当然と思われている四季が世界ではまれです。その事を、わからせてくれるのが、最近増加の目立つ外国人旅行者です。桜の季節になると大勢の旅行者が上野や千鳥ヶ淵に訪れ桜前線の上昇とともに、北上していきます。また秋になると日本独特の紅葉をみようと大挙して訪れます。

そういう外国人の姿をみて日本の良さを改めて認識します。

そういうことは他の分野でもあるような気がします。私たちの住んでいる医療の分野でも同様です。日本の医療は国民皆保険にて等しく医療が受けられるように守られています。また安価で希望すればその日のうちに受診できます。先日ドイツに留学中の大学教授の奥さまが長い間熱が下がらず、ドイツからわざわざ当センターを受診されました。稀な感染症でありましたが、１ヶ月後に帰宅されました。またイギリスからは精密検査をしに当センターを受診された患者さんがいました。イギリスでは病院受診に数か月待たされると嘆いていました。このように日本に住んでいると当たり前と思われていたことが、世界から見ると特殊であることがわかります。そういう意味では当たり前に思えることでも、日本人は恵まれていると感じなくてはいけないのではないでしょうか。この恵まれた環境を守るためには、感謝を忘れずに、大事に守っていくことが大切と感じます。

日本を訪れる外国人から四季を通じて、日本の良さを再発見する思いです。

（み）

ミニギャラリー３ヵ月

「akene個展～Ne-zooと秋散歩～」では、小さなネズミのネズーとその仲間たちが秋の風景をお散歩する、とても可愛らしい絵が飾られ、通りかかる方たちを癒してくれました。

「第１回憩いの広場写真展」では、様々な自然の風景を写し出した色鮮やかな写真の数々が、院内の通路を明るく彩ってくれました。来院される方々を魅了していました。

「中川るな作品展」では、大きな円が小さな円たちによって構成され、更に小さな円の中に細かな模様による作品で、思わず近づいてじっくり覗き込みたくなるような作品でした。訪れる方が興味津々鑑賞していました。

どの展示においても、ご覧になった方から「元気になりました」「心に残りました」など、たくさんの感想をいただきました。

ミニギャラリーは、１階中央通路と、地下１階総合健診センター前で開催していますので、来院された際はどうぞご覧ください。また、ホームページで過去の展示もご覧いただけます。

◆akene個展～Ne-zooと秋散歩～（11月）◆

◆第１回憩いの広場写真展（12月）◆

◆中川るな作品展（1月）◆

編集後記

広報委員となりもうすぐ１年。そういえば遥か昔高校時代に、友人と面白半分に小さな新聞を作成していたのを思い出しています。何かを作るという事は、楽しいものですが、校正、校閲の難しさを実感しています。ベテランの皆様の御指導を頂き、これからも当センターと読者の皆さんを繋ぐ広報誌となるよう、努めていきたいと思っています。

発行責任者　川口市立医療センター　大塚　正彦
編　　集　広報委員会
〒333-0833　川口市西新井宿180
☎048-287-2525（代表）
HP http://kawaguchi-mmc.org